

「それでは誰が救われるのだろうか」

マルコによる福音書 10 章 17 - 31 節

森島 牧人 牧師

今日の聖書の前半の部分は先回に学んだところで、その中心は「汝 尚一つを欠く」という主イエスの印象的な御言葉にありました。真面目で律法的にも熱心であった青年に突き付けられた「あなたには決定的な一つが欠けている」との主イエスの言葉は、救いの確かさを神に求めず、自分の持っているものに求めるという、彼の間違った方向性に対しての厳しい指摘でした。殆どの場合、多額の資産は、それを持っている人に人間よりもお金が頼りになると思わせ、経済的な部分を超えて、その人の魂までも支配するようになります。青年もお金だけでは足りないことをうすうす感じていたと思われそうですが、自分の持っているものを一つも手放すことなく、さらにその上に何かを積み重ね、永遠の命を確かなものにしたと考えていたのです。主イエスは彼を惜しみ、そのような求め方を捨てなさいと言われますが、それを出来ずに彼は去って行きます。

そして今日のところです。聖書には青年の去った後「財産のある者が神の国に入るのは、なんと難しいことか。」と主イエスが言われるのを聞いて、弟子たちは驚いたとあります（マルコ 10 : 23 - 24）。当時富んでいる者には、神の国に入る資格があると思われていたからです。しかし、今日の箇所少し前に、主イエスは「子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることは出来ない。」

（同 10 : 15）と言われています。とすれば「幼子は欠けている故に恵みを受け、男はすべてを持っている故に欠けているとされた」ということになりましょう。この論理は、人間社会では成り立たず、人間と神の間でのみ成立するもので、満点であることが、神との関係では欠けていることになるということです。つまり、そのことが全体の根拠を揺るがすと・・・ここに私たちの世界とは異なるもう一つの世界、聖書の世界があるのです。

さらにこのもう一つの世界には、私たちが捨てて当然だと思う 1 つを拾うことで、全体のすべてを支えることになるという＜真理＞があります。主の譬え話「失われた羊」のように、99 匹いるのだから 1 匹くらい失っても、というのではなく、むしろ 1 つを拾うことで 100 を拾うことになる、主は言われるのです。それは「神の国・永遠の命」がこの世の取引のルールによってではなく、代価など無関係なく恵み＞のルールによって与えられるからです。このことを主イエスは、「神の愛」の内容として繰り返し私たちに教え、具体的な行動によって示して来られたのです。

持っていることと欠けていることが同じであるという視点ですが、資産についても、主は富そのものではなく、その持ち方を言われていて、富との関係の中に、富を手放す自由を持つことを命じられています。「金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい。」（同 10 : 25）は、何かを持つということは私たちに傲慢にし、不自由にし、ついには私たちの生きるべき道を妨げることになると、教えておられるのです。

弟子たちの「(自分の最も大切なものを捨てなければならないとしたら) それでは、だれが救われるのだろうか」(同 10 : 26) は、私たちの疑問でもあります。主はそんな弟子たちに「人間にできることではないが、神にはできる。神には何でもできるからだ。」(同 10 : 27) とお答えになっています。

今日の聖書を通して主は、「永遠の命も神の国も救いもすべて賜物として神が私たちに与えられるものである」と言われています。これは人間の発想の対極にあるものです。私の好きなロマ書 8 : 39 「高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。」にも、そのことが示されているのです。

(説教要約 羽入田悦子)